

おそらく耳下腺唾液分泌の誘発因子として歯根膜への刺激が有効であると思われます。

- ② 総義歯着用患者においての実験は行っていませんが、咀嚼刺激により同じ様に唾液分泌が誘発されるとの報告が過去にされております。

質 問

東城庸介（歯科薬理）

無刺激と咬合圧刺激の場合とでは分泌唾液の組成に差があるか。

回 答

星 和明（口腔生理）

今回の実験では、唾液分泌量だけを測定し、唾液成分の測定は行いませんでした。

6. 消毒薬の継続使用に関する検討

大熊良子，千葉智子，阪田久美子，
高田昌彦，馬場久衛*

（附属病院薬剤部，*口腔細菌）

院内感染防止の手段として重要な位置を占める消毒薬の院内における使用状況を把握し、効率的な使用について検討することは病院管理上有意義である。

過去7年間の当院における消毒薬の使用動向を解析した結果、消毒薬の消費金額が年々増加の傾向にあり、昭和59年度には全医薬品購入金額の1/4を占めていることがわかった。中でも手指消毒殺菌剤ヒビスクラブの使用量と、5%ヒビテン液の使用濃度の改訂が消費金額に与える影響が大きいと考え、薬事委員会で検討し、他剤への変更を決め、消費金額の増加を抑えることができた。さらに、金属器具の消毒のために各科で繁用されている亜硝酸ナトリウム加塩化ベンザルコニウム液（N-オスパン液）の使用量の抑制のため、N-オスパン液の継続使用の可能性について細菌汚染試験を行い検討した。その結果、保存科のユニット消毒槽で使用しているN-オスパン液は、通常の使用においては5日間使用後も細菌は検出されず、MICも経日的に低下の傾向は認められたが、2日目までは変化しないことがわかった。そこで、ユニット消毒槽のN-オスパン液は2日目毎に交換することとし、同様の消毒を行っている他科でもこの結果を参考に、消毒液の継続使用を試行することとなり、N-

オスパン液の消費量は従来の1/2程度になった。

現在各科で使用中の消毒液についても同様の試験を行っているが、口腔外科、保存科の消毒液から数個の枯草菌が検出された。枯草菌は芽胞形成菌であり、芽胞は通常濃度のオスパン液には抵抗性を示すため、空气中、手指、口腔内で使用した器具等を通して混入したものが検出されたと考えられる。

枯草菌は病原性がないため院内感染の原因となることはないが、希釈消毒液の管理や器具の洗浄にも注意が必要であると考えられた。

質 問

村瀬博文（口外・Ⅱ）

オスパン液中に綿球などを入れた時の消毒効力及びその経時的变化と消毒効力について。

回 答

阪田久美子（薬剤部）

消毒薬の綿球への吸着は以前から問題とされており、ヒビテン液が綿球に吸着され、濃度が低下したため、ある種の細菌が繁殖し、これが院内感染の原因となった報告もある。そのため今回ヒビテン液の濃度も0.1%に引き上げられた。オスパンの綿球への吸着もわずかにあると報告されているので、各科で使用中の消毒薬の力価、汚染の問題について検討していきたい。

7. 歯科病院における医薬品情報活動の検討（Ⅰ）

当病院における医薬品情報活動の解析

千葉智子，大熊良子，阪田久美子，
高田昌彦（附属病院薬剤部）

病院薬剤師による医薬品情報活動（Drug Information Activity：DI）の目的は、医師をはじめ総ての医療従事者に医薬品に関する情報を提供し、薬物療法の適切な発

展と医療の向上に寄与することにより、薬剤師の種々の業務の中でも近年特にその重要性が強調されている。当院においても、教育病院としての重要性和歯科病院とい

う特殊性からDI活動を多面的に進めてきたが、その経過を解析したので報告する。

日本薬学会で示されたDI活動の内容は10項目からなっているが、当院においては2・3検討中のものもあるが、ほぼ大部分が実施されていることがわかった。

医薬品に関する問い合わせは、即答できる簡単なものは除き、調査し資料をもって解答したものはDIカードに記載し整理している。開院時からこのカードを集計し、解析した結果次のことがわかった。質問数は僅かではあるが年々増加し、質問者は本学職員が約80%、学外からは約20%であり、質問内容は薬理作用、薬物療法、消毒・

製剤、錠剤鑑別等が多いことがわかった。これらの質問には、日本医薬品集やExtra Pharmacopoeiaをはじめ専門の図書を利用することが多いが、特に薬物療法や副作用については洋書に有用なものが多いことがわかった。質問の内容から、他科で投与されている薬物が歯科の治療に影響を与えたり、口腔内に副作用を発生させたりしているケースがいくつかあったことから、今後とも注意を払うべき問題と考えられた。

今後、これまでの活動内容の一層の充実と、我が国においてはまだ十分整理されていない歯科薬物療法の情報の収集と整理を行っていきたいと考えている。

8. *Candida albicans* の厚膜胞子形成培地の検討

鎌口有秀, 馬場久衛, 金森啓子,
田中かえで, 小松 始, 野崎善弘,
越前敏広 (口腔細菌)

(目的) *Candida albicans* (*C. albicans*) の厚膜胞子(CH)形成能は臨床分離株の同定の際に最も重要視されている性状である。CH形成培地として多くの培地が報告されているが、一般的に使用されているものはコーンミール寒天培地に Tween 80 を添加したもの(CM)である。しかし、この培地でのCH形成には3ないし4日間の培養時間がかかるという欠点がある。そこで、演者らは20時間以内でCH形成性が判別できる培地の処方について検討を行った。

(方法) CH形成性の異なる当教室保存の*C. albicans* 15株を種々の組成のCH形成培地に塗抹し、25℃、20時間培養後、100倍で直接検鏡し、CH形成性について比較検討した。

(結果及び考察) 培地のコーンミール濃度は従来の量より30%減じた培地の方が各菌株において良好であった。

また、細胞壁の一成分であるN-Acetylglucosamine (GlcNAc) を培地1ml当り1mg添加することによって各菌株のCH形成性がさらに良好になった。さらに、培地のpHを従来使用しているpH6.2より7.2に上げることによって各菌株ともCH形成性が良好となった。そこで、コーンミール濃度を従来の70%とし、GlcNAcを1mg/mlに添加し、さらにpHを7.2に調製した培地(0.7CMG)を作製し、従来のCM培地とCH形成性を比較したところ、0.7CMGにおいて15株の全ての菌株でCHの形成がみられ、CH形成数も多かった。また、BSも少なくCH観察には良好であることが判明した。さらに、*C. albicans* 鑑別のもう一つの指標であるgerm tube形成性においても0.7CMG培地はCM培地に比べて優れていることが判った。

9. ラットの歯髄・腎臓・小腸および顎下腺アルカリフォスファターゼ活性のEDTAによる阻害と再活性化

長谷田順子, 相良りか子, 東城庸介,
松本仁人 (歯科薬理)

アルカリフォスファターゼ(AlPase)はZnやMgイオンを含む金属蛋白質であり、EDTAなどの金属キレート剤により失活する。ところで、AlPaseは臓器により酵素化学的性質が異なることが知られている。今回、ラ

ットの歯髄、腎臓、小腸および顎下腺のAlPaseについて、EDTAや二価陽イオンの効果に臓器特異性があるか否かを検討した。また、各臓器のAlPaseの電気泳動パターンを比較した。